

JICA緒方研究所・JICA横浜 海外移住資料館共催
2022年度移住史・多文化理解オンライン講座
～ 歴史から「他者」を理解する ～ 第1回

<ウチナンチュ>としての在日南米人 ——生活史から読み解く沖縄というルーツ——

関東学院大学社会学部 藤浪海

2023年1月20日(金)

1. はじめに

(1) 在日南米人の「ウチナンチュ」としての背景

● 横浜市鶴見区

- ✓ 京浜工業地帯の中核、戦前から朝鮮半島・沖縄出身者が集住
- ✓ 1980年代から、バブル景気で南米出身者が集住
- ✓ 現在では、アジア出身のニューカマーも多く暮らす

藤浪海、2015、「移民ネットワークとしてのオキナワン・ディアスポラ」関東社会学会編『年報社会学論集』28号

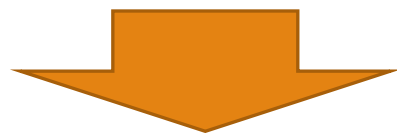
藤浪海、2017、「沖縄を旅するブラジル系移民の子どもたち」『移民研究年報』23号



1. はじめに

(1) 在日南米人の「ウチナンチュ」としての背景

南米出身者は、「日本における『外国人』」としてのみ
みなされがち



鶴見の南米出身者の多くは沖縄系
各出身社会で移民(の子ども)として生活してきた

1. はじめに

(1) 在日南米人の「ウチナーンチュ」としての背景

- 南米出身者の多くが沖縄ルーツ
(藤浪 2015)
 - ✓ 「沖縄・ラテン料理」という看板
 - ✓ 南米出身者の家庭や職場では…
 - 玄関にシーサー
 - 食卓にゴーヤーチャンプルー
 - オーディオからは沖縄音楽
 - 三線を弾いたり、エイサーを踊ったりする子ども
 - ✓ 南米ルーツの子どもと沖縄を旅する教員の取り組み(藤浪 2017)

藤浪海、2017、「沖縄を旅するブラジル系移民の子どもたち」
『移民研究年報』23号



1. はじめに

(1) 在日南米人の「ウチナーンチュ」としての背景

- 「世界のウチナーンチュ大会」
 - ✓ 世界中の沖縄ルーツの人々や沖縄に縁をもつ人々が、沖縄に集い交流
 - ✓ 「ウチナーネットワーク」を強化取り組み(藤浪 2022a)
 - ✓ 横浜・鶴見沖縄県人会も参加
- 2016年「世界のウチナーンチュの日」(藤浪 2022b)

藤浪海、2022a、「『世界のウチナーンチュ』と越境的ネットワーク」『移民政策研究』14号

藤浪海、2022b、「世界のウチナーンチュの日と帰還移民」日本移民学会編『移民研究年報』28号

Fujinami, Kai, 2023, “New Perspectives and Challenges in Japanese Diaspora Studies: A Review of the Past 20 Years of Research,” *Diasporas. Circulations, migrations, histoire* 40



1. はじめに

(1) 在日南米人の「ウチナンチュ」としての背景

● 「世界のウチナンチュ大会」

- ✓ 世界中の沖縄ルーツの人々や沖縄に縁をもつ人々が、沖縄に集い交流
- ✓ 「ウチナーネットワーク」を強化取り組み(藤浪 2022a)
- ✓ 横浜・鶴見沖縄県人会も参加

● 2016年「世界のウチナンチュの日」(藤浪 2022b)

藤浪海、2022a、「『世界のウチナンチュ』と越境的ネットワーク」『移民政策研究』14号

藤浪海、2022b、「世界のウチナンチュの日と帰還移民」日本移民学会編『移民研究年報』28号

Fujinami, Kai, 2023, “New Perspectives and Challenges in Japanese Diaspora Studies: A Review of the Past 20 Years of Research,” *Diasporas. Circulations, migrations, histoire* 40

【比嘉アンドレスさん（世界のウチナンチュの日発案者）】
ここ（＝日本）に来たら外人。どこ行っても外人ですね。どこ行ってもよその人。（中略）アルゼンチンでもそうです。僕、アンドレスとは呼ばれてなかったんですよ。ハポネス（日本人）がニックネームでしたね。かわいがっているんですね、ハポネス元気ですか。ハポネスどこに行くとか。日本人（と呼ばれる）。分からなかったら中国人、ベトナム人。アジア人だったらなんでも良かったですね。これが日系の一番の悩み事。（＊：内地に来た時も？）もう外国人ですからね。イランから来たイラン人、フランスから来たフランス人と同じ。同じ種類と言ったら失礼だけど、袋に入れられたんですね。（＊：カテゴリーに？）そうそう。カテゴリーに。でも、もちろん当たってるけど、私たち日本人の子ども、孫、ひ孫がちょっと違う扱いが欲しかったんですね。

1. はじめに

(2) ABCジャパンの日本人にも開かれた居場所作り

- 移民支援団体ABCジャパン理事長、ブラジル出身の沖縄系2世、安富祖美智江さん
 - ✓ 生活・就労・教育・心理など、さまざまな領域にわたって移民支援
 - ✓ 移民にとっての居場所としてはもちろん、日本人も気軽に立ち寄れる場であること

【関東学院大学での国際交流イベント】

司会：安富祖美智江さん、今日は貴重なお話ありがとうございました。大学生の皆さんもぜひ移民に関心があればABCジャパンでボランティアしてみてくださいね。

安富祖：ボランティアじゃなくてもいいよ。ただ話をしに来るだけでもいいよ！

- 支援団体が移民にとっての居場所を目指すことは少なくない
 - ✓ なぜ、日本人も気軽に立ち寄れる場所であることが志向？
 - ✓ 日本社会とは異質な「外国人」としてのみみなされがち…
 - しかし、ブラジルでも移民の子ども／沖縄系2世として暮らしてきた背景

1. はじめに

(2) ABCジャパンの日本人にも開かれた居場所作り

● 安富祖美智江さん

- ✓ 恩納村出身の両親は1950年代末に渡伯、長くサンパウロ市近郊のマウアー市に居住
- ✓ 安富祖さんは1968年に生まれ、大学進学後、1990年に渡日
- ✓ 群馬県伊勢崎市の工場での就労後、1993年に鶴見に移住
- ✓ 鶴見ではブラジル料理店と国際電話代理店で就労、2000年ABCジャパン結成

● ABCジャパンの4つの事業

- ✓ 「大人の自立支援」: 日本語教室や生活情報ガイダンス、電気工事士資格試験対策講座
- ✓ 「こころのサポート」: 移民の抱える困難に通じた公認心理師によるカウンセリング
- ✓ 「子どもの教育保障」: フリースクール、母語母文化教室、進路ガイダンス・ガイドブック等
- ✓ 「コミュニティ作り」: 地域・学校行事への参加、被災地支援

1. はじめに

(2) ABCジャパンの日本人にも開かれた居場所作り

● 安富祖美智江さん

- ✓ 恩納村出身の両親は1950年代末に渡伯、長くサンパウロ市近郊のマウアー市に居住
- ✓ 安富祖さんは1968年に生まれ、大学進学後、1990年に渡日
- ✓ 群馬県伊勢崎市の工場での就労後、1993年に鶴見に移住
- ✓ 鶴見ではブラジル料理店と国際電話代理店で就労、2000年ABCジャパン結成

● ABCジャパンの4つの事業

- ✓ 「大人の自立支援」
- ✓ 「こころのサポート」
- ✓ 「子どもの教育保障」
- ✓ 「コミュニティ作り」

「いま一番
力を入れている」

親への支援

- 親として必要な情報を多言語で提供（進学ガイダンス&ガイドブック）
- 生徒の親には毎月レポートで子どもの状況を説明、親との面談も適宜実施
- 日本語教室では、地域の学校行事に合わせ運動会や文化祭などで使う言葉、「マナー」や慣習を重点的に説明

居場所作り

球技大会や遠足、先輩後輩交流会など、友人作りのためのさまざまなイベント

1. はじめに

(2) ABCジャパンの日本人にも開かれた居場所作り

● 安富祖美智江さん

- ✓ 恩納村出身の両親は1950年代末に渡伯、長くサンパウロ市近郊のマウアー市に居住
- ✓ 安富祖さんは1968年に生まれ、大学進学後、1990年に渡日
- ✓ 群馬県伊勢崎市の工場での就労後、1993年に鶴見に移住
- ✓ 鶴見ではブラジル料理店と国際電話代理店で就労、2000年ABCジャパン結成

● ABCジャパンの4つの事業

- ✓ 「大人の自立支援」
- ✓ 「こころのサポート」
- ✓ 「子どもの教育保障」
- ✓ 「コミュニティ作り」

私たちが考えるコミュニティとは、外国人コミュニティのことではありません。国籍関係なく、いろいろな人がいるコミュニティとしてとらえています。鶴見には多くの外国人が暮らしていますが、日本人と外国人が関わる機会はあまりありません。そのため生まれてしまう誤解や無関心、それがきっかけで生じてしまう対立などがあるかもしれません。それを少しでもなくせるように、「〇〇人と〇〇人」ではなく、「人と人」として関われるようにするきっかけづくり、働きかけを行っています。

1. はじめに

(2) ABCジャパンの日本人にも開かれた居場所作り

● 調査方法

- ✓ ボランティアとして, 教育保障事業を中心に参加
 - 2012年7月～2017年3月 週2～3回程度
 - 2021年まで 月に1回程度
- ✓ 2021年11月に行った安富祖さんへのインタビュー

● 内容は、安富祖さんおよびABCジャパンの日本人スタッフに事前に確認いただいた

- ご氏名・団体名を公にすることに快く応じてくださり、また内容改善に向けてもご意見をくださり、ありがとうございました

1. はじめに

(3) 報告の構成

- 2. ブラジルでの生活史 ——「居場所」としての沖縄会館と沖縄コミュニティへの違和感
 - (1) 「居場所」としての沖縄会館
 - (2) <ウチナンチュ>としての文化継承
 - (3) 沖縄戦の経験と沖縄コミュニティへの違和感

- 3. 日本での生活史 ——日本語習得と可視化された在日ブラジル人の困難
 - (1) 学歴と言語能力
 - (2) 可視化された在日ブラジル人の困難

- 4. 「鶴見人」としての当事者支援 ——親への支援と日本人にも開かれた居場所作り
 - (1) 親への支援——移民の親・子どもとしての経験から
 - (2) 「鶴見人」としての日本人にも開かれた居場所作り

2. ブラジルでの生活史

「居場所」としての沖縄会館と沖縄コミュニティへの違和感

2. ブラジルでの生活史

(1) 「居場所」としての沖縄会館

- 1950年代末に渡伯した両親はカンピーナス市で綿花栽培に従事
 - ✓ 母親が体調を崩し、1975年にマウアー市で移動朝市(フェイラ)でのパステウ販売へ
 - ✓ 1968年生まれの安富祖さんも仕事を手伝った
 - ✓ 多様な人々と出会うことのできる朝市での経験がとても楽しいものであったことを強調

トレーラーで毎日違うところ(行って)、半日だけ(営業する)。むちゃくちゃ面白い。日本、ないものね。今日はこの道路でやる(ってなったら)もうその時は道路(が)全部、(移動販売)車で埋まる。面白いんだよね、毎日違う人に会えるからすごい楽しかった。(中略)もちろん大変だよ、半日働いてて半日は準備しないとイケない。でも一日じゃないから全然もう余裕。

2. ブラジルでの生活史

(1) 「居場所」としての沖縄会館

- 一方で両親との意思疎通に関して困難を抱え、両親の間には葛藤もあったという
 - ✓ 両親はウチナーグチ、子どもはポルトガル語
 - ✓ 重要な「居場所」となったのが、沖縄会館
 - ✓ 友人が集まっており、ダンスやバレーボールに興じることができた

沖縄会館はもう私の居場所。毎週土日休み、そっちですっと友だちと遊んでいた。沖縄会館行ってバレーボールやったりビリヤードもあって卓球もあったり、その後、居酒屋行ってみんなとわいわいしてて、いつも大体そういう（遊びができて）、楽しかった。バーベキューも毎月毎月のようにやってた。やっぱり、会館楽しい。

多分、（沖縄系の子の）90%（は）通ってたんじゃないかな、すごい楽しかった。別に携帯もなかったし、あの時代。でも、日曜日に集まるからみんな行く。連絡なしで行っても友だち会える、すごい楽しい。（中略）集まって話したり音楽聴いたり。ブラジル人って音楽とダンス好きで、大体そういう会館って踊る場所あるの、だからみんなそっち行って何かできる。

2. ブラジルでの生活史

(2) <ウチナンチュ>としての文化継承

- 「(沖縄の)文化守りたかった」という両親 → 沖縄会館は文化継承の場として重要
 - ✓ 毎日三線を弾いていた父親の姿を見て興味を抱き、沖縄会館での三線教室に通うように
 - ✓ 著名なブラジル人三線グループも生み出すなど沖縄文化の継承に重要な役割

私は会館でその先生の下で、6年間ぐらい（三線を）やってた。発表会に行ったり、他の会館行っておじいちゃん・おばあちゃんの誕生日にプレゼンしたり。（*：ご両親から言われて始めたのですか？）うん、言われたけど、もともとそういうの好きだったね。やりたかったね、三線。（中略）私とお兄さん、ずっとやってた。今は忘れたよ。でも（来日後に生まれた）娘は上手。上の娘も上手。下の娘もできる。家にある、三線。（*：三線教室は若い人も通っていたのですか？）若い人だけだよ。大体10歳から18歳。その時、私14歳。Ton Ton Mi知らない？ ウチナンチュ大会でもやったよ（＝演奏したよ）。昔、フジテレビの緑のやつと赤いやつ（＝ガチャピンとムック）と、半年ぐらい一緒に出た。グループまだあるよ。

2. ブラジルでの生活史

(2) <ウチナンチュ>としての文化継承

- 在日ブラジル人の子どもへの文化継承 → ブラジルの文化であることが暗黙の前提に
 - ✓ ブラジルで継承した沖縄文化を日本生まれの子どもに継承している
 - ✓ 実はこうした文化継承は、そのほかの家族においても語られること

【ある沖縄ルーツのブラジル出身者】

やっぱり（本人が）好きになるとか好きにならないっていうのは別として、自分たちも一番下の子だけウチナンチュのアレ（＝エイサー）で好きになったけど、長女もしばらくの間やってたけど、やっぱり高校になってからエイサーもやめちゃって（中略）。うちの長男も全然興味なしだから。あまり沖縄、沖縄って言いすぎたかもわからないね。（＊：結構子どもたちには沖縄のことについて言ったのですね） 言いました、言いました。沖縄のアレは結構。

2. ブラジルでの生活史

(3) 沖縄戦の経験と沖縄コミュニティへの違和感

- 沖縄系同士で関係を築かせる場を提供

→将来的に沖縄系同士での結婚を促そうという願い

あの時はやっぱり日本人は日本人と結婚してほしい、日本人と友だちになってほしい。あったよね、そういう何かブラジル人とあんまり付き合うなみたいな。ブラジルに住んでいても。
(* : 交流するのは日本人のほうがいいのですね?) 日本人じゃなくて沖縄の人。できるだけお友だちもやっぱり沖縄会館か日本会館。ブラジル人ってあまり、あまり好きじゃなかったね、そういう友だち。

2. ブラジルでの生活史

(3) 沖縄戦の経験と沖縄コミュニティへの違和感

- 同じ出身国(地域)同士での結婚への志向は、移民において決して珍しいことではない
 - ✓ しかし安富祖さんの両親が沖縄系同士での交際にこだわる背景には、沖縄戦の経験
 - ✓ 沖縄戦を経験した両親にとって、沖縄系の人々以外への警戒心は相当なものであった

戦争あったからそういう（＝沖縄系と結婚してほしいという考えに）、なったみたい。（両親にとって戦争は）やっぱり怖かったね。（私がブラジルに）帰った時にちょっと話聞くと、やっぱり誰がいい人か分かんないし、沖縄の戦争あった時に日本人も沖縄人を殺したしアメリカ人も殺したから、誰がいい人か分からないから自分で守るしかない（と言っていた）。（中略）もう覚えてるもんね。お父さん5歳でお母さん4歳。でもそれ、大変だったから覚えてるね、忘れない。口で話した時に、やっぱり残ってるよね。

2. ブラジルでの生活史

(3) 沖縄戦の経験と沖縄コミュニティへの違和感

- 同じ出身国(地域)同士での結婚への志向は、移民において決して珍しいことではない
 - ✓ しかし安富祖さんの両親が沖縄系同士での交際にこだわる背景には、沖縄戦の経験
 - ✓ 沖縄戦を経験した両親にとって、沖縄系の人々以外への警戒心は相当なものであった

だから、日本人あまり好きじゃないとか、やっぱりいろいろそういう(経験が)あったからしょうがないよね。多分、忘れないかもね、ブラジルでそのまま忘れてない。(※：日本人をあまり好きではないというのは、日本軍にひどい扱いされたというのがあるのですか?) みたいね。目の前で見ただからやっぱり忘れない。(中略) やっぱり、その時のお父さんのお母さん、1人で5人の子どもたち守ったし、すごい大変だった。何かガマの中で隠れて食べ物ないとか。聞くとすごいつらいなって。

2. ブラジルでの生活史

(3) 沖縄戦の経験と沖縄コミュニティへの違和感

- 多様な人々が集まるフェイラでの経験に面白さを見出していた安富祖さん
 - ✓ 「何で何で？ ブラジル住んでるのに何でブラジル人と友だち駄目なの？」
 - ✓ ウチナーグチの正確な意味はわからず, そもそも両親は沖縄戦のことを話さなかった
 - ✓ 移民の子どもとしてもったこうした違和感は現在の活動と関連付けられることとなる

お母さん言ってた。外人危ないよ, 何されるかわからないよ。ブラジル人のこと外人っていう。もう, なーんでも外人外人外人。今だったらね, 外人は差別語, (正しい言い方は) 外国人ね, わかるけど。そのときはもう, 外人外人。本当は自分たちが (ブラジルでは) 外人なのにね。おかしいと思わない? でしょ? 家に入れるのも外人だめ。日本人。なるべく沖縄の人。沖縄の人以外だめ。 (中略) だからね, 沖縄のコミュニティはゲットー化してる。沖縄の人で固まってる。

2. ブラジルでの生活史

(3) 沖縄戦の経験と沖縄コミュニティへの違和感

- 両親の結婚への考え方は、さらに彼女の大学進学にも影響
 - ✓ 「結婚したら名前変わる」という理由で、大学進学に関して母親から強い反対にあった
 - ✓ 父親が母親をなんとか説得してくれ、建築デザインを大学で学ぶことができた
 - ✓ 大学進学は、来日後の日本語能力の形成に影響することとなる

(女性が大学に進学するのは) ブラジルでは普通だったけど、やっぱり日本人の考え方、あの時、違ったのかな。女は別に大学行かなくていいって、お金の無駄って言われたことはあるね。結婚したら名前変わるし別に大学行かなくていいって言われたんだけど、行きたかったから。

(* : お金の無駄というのはご両親に言われたのですか?) そう、お母さんからね。多分、同じ女性だから、そう思ってたんじゃない? あの時、「何言ってるのかな」って思ったんだけど(笑)。(中略)でもお父さん、すごい優しい人で、やっぱりきょうだいでみんな一緒、同じでずっとやりたくて、だから別に大学もオッケーに。

2. ブラジルでの生活史

(3) 沖縄戦の経験と沖縄コミュニティへの違和感

- ブラジルでの生活史で確認しておきたいのは…
 - ✓ 沖縄会館が、「移民の子ども」であった安富祖さんにとって重要な居場所に
 - ✓ 多様な人々との交流するフェイラでの経験にも楽しみを見出しており、沖縄系以外との交流を避けるコミュニティのあり方には疑念



こうした経験は現在の支援活動に関する考え方に関連付けられることとなる

3. 日本での生活史

日本語習得と可視化された在日ブラジル人の困難

3. 日本での生活史

(1) 学歴と言語能力

- 安富祖さんは、1990年に日本に移住
 - ✓ 父親の願い
 - 「1人1人日本に来て親戚と会って、あと文化学んで2年ぐらいで戻る」
 - そのなかで「親戚に沖縄文化(を学んできてほしい)」
 - 両親は安富祖さんや次兄の渡航費などを負担してくれた
 - ✓ 自身の希望 …「1人暮らししたかった、家を出て自分でどこまでできるのか」
- 沖縄会館の友人とともに渡日 →群馬県で働いて、沖縄に時々遊びに行く
 - ✓ 群馬県伊勢崎市の食品加工工場で働くことに …すでに多くのブラジル人
 - ✓ 大卒者は機械のオペレーター、高卒者は箱詰め
 - 日本人から多くの日本語を教えてもらう機会

3. 日本での生活史

(2) 可視化される在日ブラジル人の困難

- 群馬県で暮らしていた彼女が次兄を頼り鶴見に移住するようになったのは、1993年のこと
 - ✓ ともに来日した友人が病に倒れブラジルに帰国
 - ✓ すでに鶴見に暮らしていた兄を頼り、鶴見へ

- 鶴見では大手電機会社の顕微鏡検査の仕事に従事していた
 - ✓ 結婚後1995年長女を出産 → アルバイトとしてブラジル料理店で就労
 - ✓ この料理店での就労にも、日本語能力の有無が大きく影響

3. 日本での生活史

(2) 可視化される在日ブラジル人の困難

- フェイラで子どものころから接客経験を積んでいた安富祖さんは、半年のうちに店長に
→ 閉店作業なども担うなかで在日ブラジル人が寂しさや困難を抱えていることを実感

たまに帰らないお客さんいて、やっぱり相談がね（多かった）。やっぱり寂しい人いっぱいいたね。考えてみると、1人で日本に来て周りに親戚いないじゃない？ ご飯食べて帰ったら誰もいない。やっぱり誰かと話したいんだよね。職場の人あまり合わないとか。お店へ来て話をすると、すごいそういう人すごい多かった。

特に男性。で、こっち女性だったじゃん。やっぱり、そういう職場（＝電気工事関連の職場）、大体、男性でしょう？ やっぱり女性と話したいとかそういう（気持ちもあって）、朝まで話（聞いて）。お客さんだし、でもずっと楽しいって（言ってくれた）。「帰りたいな」、「ああ、疲れた」、「でも帰れない」。毎日のようにだったね、そういう相談したい人とか話したい人（が来るのは）。

3. 日本での生活史

(2) 可視化される在日ブラジル人の困難

- 3年ほど働いたころ、客に日本語能力や接客スキルを買われ、国際電話代理店で就労
 - ✓ この会社でも在日ブラジル人から多くの相談
 - ✓ 支援団体結成のきっかけに

(国際電話の代理店として) いろんな人と話してて、相談とか日本のいろいろのことを聞いたり、そういうあったからNPOできたのかな。やっぱり、(こちらが)ポルトガル語話すとみんな聞くんだよね、いろいろ。ほんと日本人から見るとすごい普通(なことを聞かれる)。

たとえば、「宅急便来た(けど)、誰もいなかった。あの不在の紙(=不在配達票がポストに)あった。それどうすればいい?」とか、「どうすれば荷物(受け取れるのか?)」とか、(そういうことが)分からない。「市役所行ったら何か紙もらった」とかそういうほんと細かいもの。

3. 日本での生活史

(2) 可視化される在日ブラジル人の困難

- 団体結成までの日本での生活史で確認しておきたいのは…
 - ✓ 沖縄での親戚との交流と沖縄文化の学習を望む父親の願いのもとに渡日
 - ✓ 父親のおかげで獲得した大卒という文化資本が日本語習得に結びついた
 - ✓ 日本語能力を買われ就労した職場で、在日ブラジル人が抱える困難を認識

4. 「鶴見人」としての当事者支援

親への支援と日本人にも開かれた居場所作り

4. 「鶴見人」としての当事者支援

(1) 親への支援——移民の親・子どもとしての経験から

- 2009年から教育に注力、「今も一番力入ってるのは教育」 →なぜ？
 - ✓ 2009年文部科学省「定住外国人の子どもの就学支援事業（虹の架け橋教室事業）」
 - 2008年にリーマンショックにより移民の子どもの不就学が社会問題化
 - 移民の子どもの就学を促す学校外での支援に対し補助金を交付
 - ✓ 2人目の娘に関する経験 →実感したのは、親としての知識不足

上の娘は真面目だったから多分できたと思うね。だって私、何も分からなかったね、その日本のシステム。でもやっぱり娘、一人でした。だから次の娘は、じゃあちゃんとやらなきゃって思ったんだけど。

たとえば小学校の時、ほんと情けないな、国語の音読知らなかった。全然（音読という）言葉（自体を）知らなかった。2番目の生まれた後に知った。ということは上の娘は、1人で全部やっていた。国語とかすごい大変だったみたい。それ全然知らなかった。本当はそれ、親（が）やるべきだったのに。

4. 「鶴見人」としての当事者支援

(1) 親への支援——移民の親・子どもとしての経験から

- 移民の親としての経験は、安富祖さん自身の移民の子どもとしての経験とも重なるもの
→ 子ども時代に両親に学校に関する相談をできなかったことを「残念」だったと表現

私、ブラジルで子どもの時に、親が日本人じゃん。(親は)言葉分からない、ブラジルのシステム分からないから、私、大学まで1人で全部やった。でも、たまにあるじゃん、そういう分からないところ。でも相談する人、誰もいなかった。周りの人みんな、やっぱりおじさん・おばさん、同じ日本人だからポルトガル語話せない。でも、やっぱり難しかったね。私の周り友だちも大体同じ。

やっぱり自分1人で全部やったから。でも、たまに何かポルトガル語で話したかった。でも親は日本語、ポルトガル語できなかったから、それ、ちょっと今でも残念だなと。あまりコミュニケーションなかったから。

4. 「鶴見人」としての当事者支援

(1) 親への支援——移民の親・子どもとしての経験から

- ABCジャパンでは、とかく移民の親への支援に力を入れている
 - ✓ 日本語教室では、運動会や文化祭などといった学校行事に合わせた日本語学習
 - ✓ フリースクールに通う子どもの状況はレポートで親に連絡、適宜親との面談も実施
 - ✓ 小学校から大学進学、キャリア形成に関しても、多言語でガイドブックやガイダンスを展開
→親への支援の充実の背景には、安富祖さん自身の移民の親・子どもとしての経験

私もそうだけど、他の外国の人、（教育制度や学校文化について）もう全然知らないと思う。だから、私、いつもそういうマニュアル（作る）だけじゃなくて1回説明したり、その人たちから電話来ると相談したり、少しずつ少しずつ（やっている）。それで、子どもが学校で恥ずかしくならないようにいろいろサポートしてる。

4. 「鶴見人」としての当事者支援

(1) 親への支援——移民の親・子どもとしての経験から

- 日本人とのつながりの重要性は、「マナー」の重視へ
 - ✓ 日本語教室では、日本語だけでなくさまざまなマナーが伝達
 - ✓ 自身の移民の子どもとしての経験からもこの点を重視 → 子どもの「恥ずかしい」思い
 - ✓ 「子どもの経験やって今は親の（経験）。やっぱり両方感じたから。だから多分、こういう活動できるんじゃないかな」

たとえば、入学式、日本ってスーツ（を着用するのが一般的）とか外国人、分からないじゃん。普通（の服で出席すると）目立っちゃうじゃん、嫌な目で見ちゃうよね。やっぱり最初からそれ（＝「普通」のふるまい）をしないと。（中略）最初からそれやったら（＝「普通」と異なるふるまいをしたら）もうずっと卒業するまで「あの親が良くない」とかね（言われてしまう）。私も恥ずかしかったね、ブラジルで。「ああ、親、ポルトガル語しゃべれない、もし学校行ったら、変な言葉言ったら恥ずかしい」とか子ども思っちゃう。こっち（＝日本）の（移民の）子どもたち同じね。やっぱり、子ども悪くない。

4. 「鶴見人」としての当事者支援

(2) 「鶴見人」としての日本人にも開かれた居場所作り

- ブラジルの沖縄コミュニティへの違和感もまた、団体運営のうえでの重要な参照点
→ イメージしてきたのは、自身が「居場所」としてきたブラジルの沖縄会館

私、ずっと会館を過ごしてたじゃない？ ブラジルで。会館と団体、あまり変わらないよね。会館はもう居場所。だから、日本にも居場所をつくりたかった。（中略）（*：現在の活動には、沖縄会館のイメージがあるのですね） あるある。誰でも来ても「あ、居場所だね」って。だから結構、こっちも日本人来るしね。それが楽しい。誰でも来ても（迎え入れる）。コロナで去年（=2020年）からそれできなかったけど、今日みたいに急に人来て（迎え入れて話を聞く）、そういう感じ（でやってきた）。いつ来ても「いらっしゃい」って（言える）、そういう場所だったらいいなって。とくに外国人そういう場所あまりないから。やっぱりもうないと困る。

4. 「鶴見人」としての当事者支援

(2) 「鶴見人」としての日本人にも開かれた居場所作り

- 沖縄会館は「体育館みたい」に規模が大きい
 - ✓ 「鶴見でも会館つくりたいなって何回か思ったことある。ただ、場所が高いじゃない？ だから無理無理無理、家賃払えない」
 - ✓ しかし規模は小さいながらも沖縄会館のイメージを付しながら、この団体を人々の「居場所」としたいと考えている
- 実際に、フリースクールでは居場所としての場作り
 - ✓ 球技大会や遠足、先輩後輩交流会などさまざまなイベント → 友人作り
 - ✓ 年齢の近い大学生ボランティアが支援者 → 子どもたちが話しやすい環境
 - ✓ 学校の帰り道などに教室に立ち寄り、たわいもない会話をして帰る卒業生

4. 「鶴見人」としての当事者支援

(2) 「鶴見人」としての日本人にも開かれた居場所作り

- 移民の子どもにとって支援団体がこのように居場所となること自体、さして珍しいことではない
→ 重要なのは、沖縄会館が否定的な意味でも、イメージの源泉となっていること
- 沖縄戦の経験を背景に沖縄系の人々以外との交流に否定的であった両親
 - ✓ それへの違和感 → 出自にかかわらずさまざまな人に開かれた居場所にしたい
 - ✓ 国籍や出自を越えたコミュニティ形成 → 彼女なりの沖縄戦の批判的継承

私、日本に来て子どもができて、別にブラジル人だけ付き合うじゃなくて、別にないんだよね、その心配は（＝ブラジル人とだけ交際関係を結んでほしいという考え）。（ブラジルの沖縄系1世の人々は）やっぱり昔の人だよね、考え方、全然違う。

4. 「鶴見人」としての当事者支援

(2) 「鶴見人」としての日本人にも開かれた居場所作り

- こうした考え方は団体運営のあり方そのものにも貫かれている
 - ✓ 支援者同士の軽食会など、支援者同士の関係作りにも注力
 - ✓ 毎年支援者をねぎらうイベントを開催し支援者全員への感謝状を贈呈
- 大学生ボランティアを含めかかわる人すべてに団体の一員としての意識も醸成

もちろんABCは1人じゃないから。すごい（多くの）人たちが手伝ってるし、こっちも手伝えるし。やっぱり、外国人だけの団体、多分うまくいかない。でも、日本人だけの外国人サポートする団体もうまくいかない。やりたい気持ちはあるんだけど、どうやってやるのか分からない。もともと（日本人だけだと外国人の気持ちが）分からないから。

だから、こっちは両方、ブラジル人もいるし日本人もいて、他の国の人たちもいるから多分うまくいってる。やっぱ、いろんな気持ちの人を分かんないと、多分、団体つくれないと思う。特に外国人サポート。うちはチームワークでやってるからね、楽しくやってるよ（笑）。

4. 「鶴見人」としての当事者支援

(2) 「鶴見人」としての日本人にも開かれた居場所作り

● 「鶴見人」というアイデンティティ

私が（ブラジルに）いた時、外国人だったね、「日本人、日本人」（と言われた）。（でも）日本来た時には「外人、外人」とか「外国人、外国人」（と言われた）。（*：ブラジルでも、「ブラジル人」とは認めてもらえなかったのですね？）そう、名前がポルトガル語でもないし、名前見ると全然ブラジル人じゃないね（笑）。顔見ても、ブラジル人の顔じゃないし。ブラジルにいる時は「あ、日本人、日本人」（と言われた）。日本来たときには「外国人、外国人」。何か別に関係ないね、何人でもいい、だから鶴見人。一番言いやすい（のは）鶴見人。

- ✓ 日本のみならずブラジルでも、移民として生活を送ってきた背景
- ✓ 「日本人／外国人」という二項対立的な関係性を揺るがし、ルーツを問わずに交流・協働していこうとする姿勢

5. おわりに

- ブラジルでの沖縄人の子どもとしての経験, 日本でのブラジル人の親としての経験のもとでの活動
 - 「鶴見人」として語る越境的な生活史からは、「外国人」「ブラジル人」「ウチナンチュ」などという単一のカテゴリーに回収されない姿が浮かび上がってくる
- 「外国人」と一括りにされがちな日本に暮らす移民
 - ✓ しかし、そこには一括りにしえない多様な歴史と背景、そしてアイデンティティ
 - ✓ それぞれがいかなる思いを抱き生活を送っているのか、今一度、向き合ってみることが必要